

## 「靈主體従に生きよ」

肉體は心の姿である。心そのままの顕現であり、心に呼応するものである。肉體を構成する主體は血液である。全身は血が元である。血は全身の至る所の組織細胞を潤し養っている。血は絶えず清められ、補給が必要である。これを働かせるのが呼吸作用で、呼吸で血は絶えず清められ、空気の養分を受けて、全身を廻って養っているのである。この血が心の正体即ち神から與えられた神性である。呼吸作用で新たに養分をとるのは玉の緒から神の光を受けるのである。人は絶えずこの光を摂取するのでなければ生きてはいけない。

血液が靈化して靈身を形成すること、呼吸系統を司るものは直接神経であり、心臓系統を司るものは交感神経であること、神の所在である至大天球に相当するものが神経中枢の脳であり、地球に相当するものが消化系統その他をおさめた胴體であることなど、宇宙の真相に照合するならば、人の肉體の構造と作用はまことに神秘であり、またその意義は深いのである。

靈の御祖みおやは天球であり、體の御祖みおやは地球である。この故に靈は本、體は末という順序が定められているのであって、心は體の上に位すべきはいうまでもない。嚴密に言えば靈も體も共に神の賦與ふよし給う処であるから、上下はない筈であるが、働きかける順序によって靈が本となり、體は末ということになるのである。心を用いて體のために使用するのには明らかに體主靈従たいしゅれいじゆうであって、宇宙の本則・順序に逆らっていることは明々白々である。本来は善もなく、悪もなく、ただ惟神のまま、神の御意みこころのままであるのが自然の在り方である。仮に體主靈従を行なうことを悪という。その大氣に逆らう度合を悪の度合とし、これに對照するところの靈主體従れいしゅたいじゆうを善の度合としたものである。

體主靈従の進み方を真理であると誤認し、自己保全のため優勝劣敗を当然なことと考え、弱肉強食主義で世を渡るを人生態度とし、これを迷信するが故に世に虚偽が発生しているのである。悪と虚偽は本来許されないところであるから、我と我が手で地獄を作っているのである。これに反して靈主體従の進み方は、神に近づき帰ろうとする本然の在り方を真理とするものである。